菊川町埋蔵文化財調査報告書第44集

# 政所（まんどころ）遺跡

1997

静岡県菊川町教育委員会
静岡県袋井土木事務所

菊川町埋蔵文化財調査報告書第44集

# 政所（まんどころ）遺跡

1997

静岡県菊川町教育委員会
静岡県袋井土木事務所

# 例　　言

1．本書は、平成8年3月27日から4月10日にかけて実施した静岡県小笠郡菊川町中内田4282番地に所在する政所遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査を行うに至った原因は、周知の遺跡内において河川改良工事が計画されたためである。調査に要した費用は、袋井土木事務所が総事業費の18%で町が82%を負担した。

3．調査体制は以下のとおりである。

| | |
|---|---|
| 調査主体 | 菊川町教育委員会 |
| 調 査 員 | 塚本和弘（菊川町教育委員会） |
| 作 業 員 | 井指秋雄・服部喜三郎・榊原義弘・高岡三郎・丸尾安代<br>織部節子・長谷山寅男・杉山花江・杉田孝江・黒田文江<br>田中悦子・山川加知夫・伊藤初恵・栗田敏子・野中秋子<br>福井京子 |
| 補 助 員 | 堀内初代・三ツ井しの |
| 室内整理 | 萩原紀江・吉野由喜子 |

4．本書の執筆及び編集は塚本が行った。

5．遺物整理及び実測図・挿図作成は、堀内初代、松井由美子の協力を得た。

6．遺構・遺物写真は、塚本が撮影した。

7．本調査及び本書刊行に関する事務は、菊川町教育委員会生涯学習課が行った。

| | |
|---|---|
| 教　育　長 | 鈴 木 静 夫 |
| 事 務 局 長 | 横 山 守 孝 |
| 生涯学習課長 | 〃 |
| 文化振興係長 | 石 川 睦 美 |
| 担　当　者 | 塚 本 和 弘 |
| 事　務　員 | 松 下 昌 子 |
| 臨時事務員 | 西 野 洋 子 |

8．実測図・写真及び出土遺物は、菊川町教育委員会が保管している。

# 目　　次

第Ⅰ章　遺跡の位置及び環境……1

第Ⅱ章　調査に至る経過及び方法……4

第Ⅲ章　調査の概要……7

第Ⅳ章　まとめ……12

# 挿　図　目　次

第1図　位置図（1：2500）……1
第2図　遺跡の位置と周辺の遺跡……3
第3図　グリット配置図……5
第4図　全体図……6
第5図　出土遺物実測図1……9
第6図　出土遺物実測図2……10
第7図　出土遺物実測図3……11
第8図　上小笠川の流路復元図……13

# 挿　表　目　次

第1表　周辺遺跡地名表……2

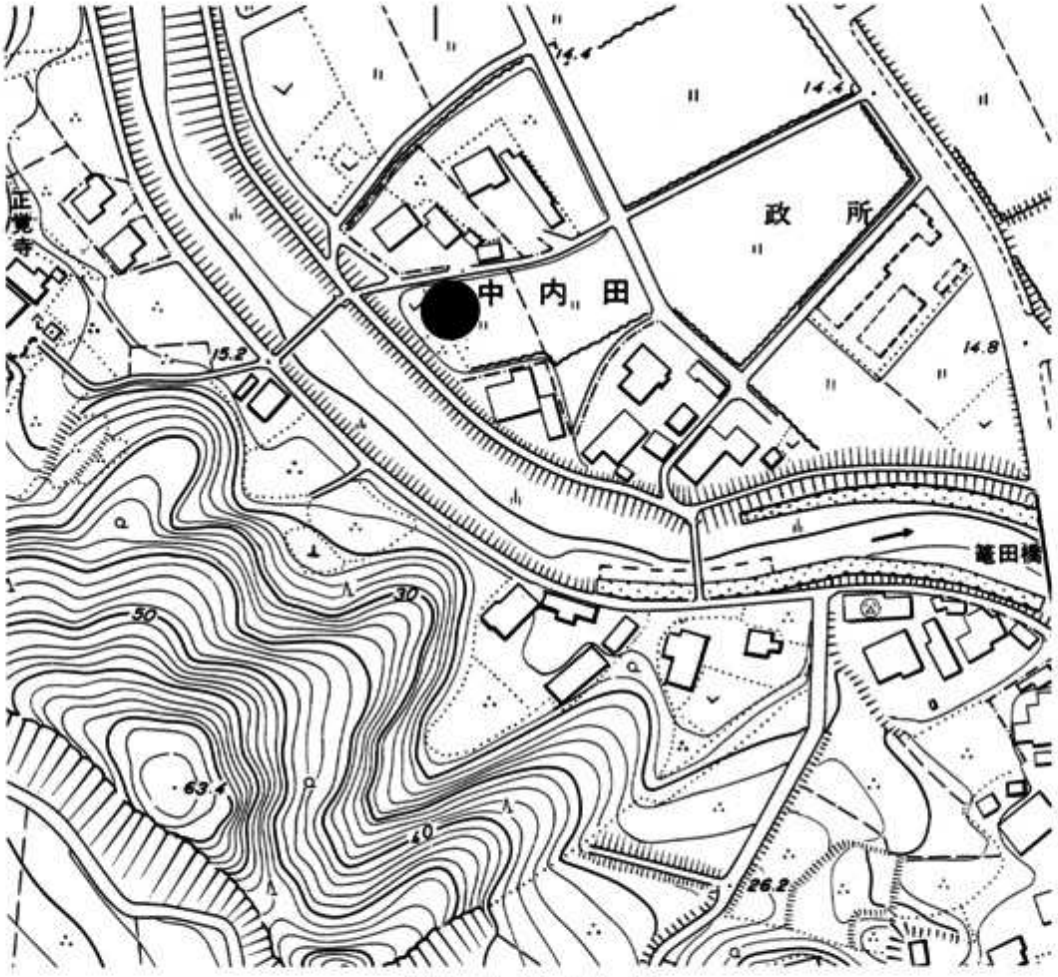
# 写真図版目次

昭和20年代頃の上小笠川
図版1　調査前全景　　機械による掘削作業
図版2　調査風景
図版3　B3区完掘状態（東より）　　B3区完掘状態（北より）
図版4　C3・4区上面完掘状態　　C3・4区下層完掘状態
図版5　D3・4区完掘状態　　出土遺物1
図版6　出土遺物2
図版7　出土遺物3

# 第Ⅰ章　遺跡の位置及び環境

政所遺跡は、菊川町中内田政所に所在する。中内田地区は町内でも南西部に位置し、政所・森・御門・杉森・月岡・耳川村からなる。地区の南と北に丘陵が東西に延び、南は下内田地区、北は加茂地区の境で、西は掛川市と隣接している。地区の中央には上小笠川が流れ沖積平野が広がる。この地域は、沖積平野では稲作とレタス栽培、丘陵部では茶園となっており町内でも有数の農業生産地となっている。

政所村は、中内田地区でも南に位置し、下内田地区との境となっている。集落は、小笠山山麓から延びる丘陵の裾を上小笠川が緩やかに蛇行し流れ、この川の両右岸にみられる。この地域には、主要道、県道小笠・掛川線が走り南北を結ぶ重要な交通路となっている。また、この道路は相良往環、別名塩の道と呼ばれ現在の道路より上小笠川に近い地点を走る。古代においては海路と陸路を結ぶ道として経済路であり、菊川をこえる政所が重要な地点であった。そのため周辺には屋敷地地名が残り早くから




第1図　位　置　図

文化、経済の栄えた地域であったことが伺える。

この地域の遺跡の分布より歴史をみてみよう。政所遺跡をはじめこの付近一帯には、14ケ所の遺跡が確認され、遺跡の多い地点となっている。これらの遺跡の所在は、昭和20年代頃郷土史家、西郷藤八、鈴木則夫、堀川録郎各氏の研究に寄与するところが多く、この時期に遺跡地名の基礎が築かれた。その後昭和50年頃、静岡県教育委員会による静岡県内横穴群分布調査が実施され、杉森・政所・森地域の横穴群の状況が明らかにされた。昭和60年頃になると公共福祉の整備や民間開発による大規模な開発が行われ、それに伴う発掘調査によって遺跡の範囲や性格がより明確となった。特に、県営圃場整備事業に伴う調査によって沖積平野での遺跡の確認はこの地域の歴史に新たな資料を提示する結果となった。

縄文時代では、月岡や御門地域の丘陵部で石器や土器が表採されている程で、横地の三沢西原遺跡や堀之内の高田ケ原遺跡などの大規模な集落跡とは考えにくい。

弥生時代になると、沖積平野を中心に遺跡は多く分布し、東ノ坪遺跡、御門前遺跡などの大規模な遺跡をはじめ政所遺跡、森前遺跡、山本遺跡など小規模な遺跡も含め上小笠川の両岸に集中している。昭和63年度の発掘調査によって東ノ坪遺跡より中期の嶺田式土器が方形周溝墓や集落跡から出土しており、この地域でも早い時期に人が住んだ地点となっている。後期になると御門前遺跡や森前外屋敷跡で集落跡が発見されており、上小笠川流域での集落の広がりがこの時期に集中する。また、丘陵部には御門前Ⅰ遺跡の分布が確認されているが、性格については明らかでないものの町内では後期後半から古墳時代前期にかけて丘陵部に集落が築かれる傾向がみられることから、おそらくこの時期のものであろう。

奈良時代から平安時代では、森前遺跡や御門前遺跡で掘立柱建物が発見されている。今まで弥生時代から古墳時代まで集落跡であった地点は、平安時代からそれ以降の中世にかけて再度集落として構成される場合があるものの生活の場は丘陵部の低位地や現存の集落付近の近い地点に移行するようである。文献資料である和名秒によれば中

**第1表　周辺遺跡地名表**

| 番号 | 遺跡名 | 時代 | 備考 | 番号 | 遺跡名 | 時代 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 御門前遺跡 | 弥生～鎌倉 | 平成元・2年度調査 | 8 | 外屋敷遺跡 | 弥生～鎌倉 | 昭和60年度調査 |
| 2 | 山本遺跡 | 弥生 | | 9 | 森前遺跡 | 弥生～室町 | 〃 |
| 3 | 東ノ坪遺跡 | 弥生～室町 | 昭和63・平成元年度調査 | 10 | 山田横穴群 | 古墳 | 昭和63年度調査 |
| 4 | 政所A横穴群 | 古墳 | | 11 | 御門Ⅰ遺跡 | 弥生 | |
| 5 | 東平尾横穴群 | 古墳 | 昭和56・57年度調査 | 12 | 杉森横穴群 | 古墳 | 昭和61・62年度調査 |
| 6 | 政所遺跡 | 弥生～鎌倉 | 昭和63年度調査 | 13 | 辻ノ前遺跡 | 奈良～室町 | 昭和62年度調査 |
| 7 | 政所横穴群 | 古墳 | 昭和47年度調査 | 14 | 頼実遺跡 | 奈良～室町 | 昭和61年度調査 |

第2図　遺跡の位置と周辺の遺跡

内田地区は城飼郡鹿城郷に属していたと推定されている。沖積平野には、二ノ坪や東ノ坪（十ノ坪）など条里地名が残り水田の整備開発が行われたことが伺える。しかし、発掘調査ではその痕跡は後世の開発によって削平されていたりして確認することはできない。中世になると政所・御門などからも明らかなようにこの時期を繁栄する地名資料が残る。今回の調査地点にあたる政所は、政務をとる場所を示すものである。中内田は内田荘の一部で天台宗応声教院にみられる天台宗寺院である園城寺の寺領荘園であったと考えられ、当時の政所での政治経済の状況下では元屋敷や屋敷地名が存在することは、領家方、地頭方の居館跡と何らかの関連する地点ではないかと推測されている。考古学の成果では、東ノ坪遺跡で平安時代から鎌倉時代にかけての大溝とそれに直行し走る区画溝が確認されているが建物跡は不明である。また、御門前遺跡では鎌倉時代の掘立柱建物跡と井戸を伴った屋敷地を溝によって区画する遺構が発見されており、当時の生活を知る手掛りとなる良好な資料となっている。この地域は弥生時代から中世にかけて規模の大小はあるにせよ、連綿と人が生活を営んでいたことが遺跡の分布よりかいまみることができる。今回の調査は、旧河川の調査であったが、二次堆積内より各時代の遺物が出土しており、この流域をめぐる人々の生活の一端を繁栄するものである。

## 第Ⅱ章　調査に至る経過及び方法

中内田地区は、典型的な農村地域であったが近年の産業経済構造の変化によってこの地域の農業にも大きな変化が生じた。昭和60年頃始まった県営圃場整備によって、一区画の水田面積が広くなり排水路、農道の整備が行われ機械化の導入により近代化生産農営がスタートした。また、車社会に対応するため主要道、県道掛川・浜岡線の拡張、県道高瀬・菊川線の延長など交通網の整備も併せて進められ、農村地帯は近代化農村地域へと変貌を遂げた。一方で農業者の後継者や近代化の問題等によって農業経営に変化が生じ、さらに交通網の整備によって田畑は宅地へと飛躍的に変化を遂げた。その結果、今までに水田が雨水の調整的役割を果たしていたが道路はアスファルトになり、水田面積の減少などの要因によって河川は増水し、常に大雨のたびに水害の危険にさらされる結果となった。この問題を解決するために、一級河川上小笠川の改良工事が部分的に進められた。

このような状況下、平成７年８月７日付袋土第1025号で袋井土木事務所より菊川町教育委員会に遺跡の所在の照会があった。計画によると中内田地内政所付近での一級河川改良工事であった。計画内には、周知の遺跡である政所遺跡が分布していたため同年８月10日付菊教 第422号で回答する。また、県事業であったため静岡県教育委員会文化課に協議を依頼した。その後、袋井土木事務所、静岡県教育委員会文化課、菊

川町教育委員会の三者で協議がもたれ計画内を確認調査を実施することとなった。確認調査は、菊川町教育委員会によって工事計画内に３ケ所設定し重機を用いて行った。その結果、河川敷地内には遺跡の所在は確認されなかったが、正覚寺橋の取合道路敷で遺物が出土したため、この部分について遺跡の可能性があることになった。平成８年２月２日付袋土 第437号で埋蔵文化財発掘調査依頼が提出され３月より町教育委員会が主体となり実施することとなった。

調査は、道路計画範囲400㎡を対象とした。調査区内を10ｍ方眼のグリットに区切り、このグリットを基準に発掘調査を実施した。各グリットは、東西を数字にし、南北をアルファベットとして設定した。基準の基軸の方位は、Ｎ－45°－Ｗである。

調査の方法は、道路計画範囲内の表土をバックフォーにより除去後、人力によって遺構検出作業・精査作業・計測作業・写真撮影作業の順に従い行う。遺構検出及び精査作業には、唐鍬、鋤簾、移植ゴテなどの道具を使用した。各遺構・遺物は、出土状態及び完掘状態で計測・写真撮影を行い完掘する。旧流路については、基盤が砂層と砂利層から成り、崩れ安く危険であったため掘削は機械を用い、遺物の取り上げと土層観察を中心に実施した。計測作業は、不二総合コンサルタント株式会社に基準点の設定を依頼し、調査区の南端に仮ＢＭ（13.818）を設置し、これを基準に測量をした。遺構実測は、基本的に１／20の縮尺とした。写真撮影には、６×７判カメラと35㎜カメラを使用し白黒フィルムとカラーフィルムを併用した。撮影方法には、高所作業車を利用し斜・垂直撮影を行った。

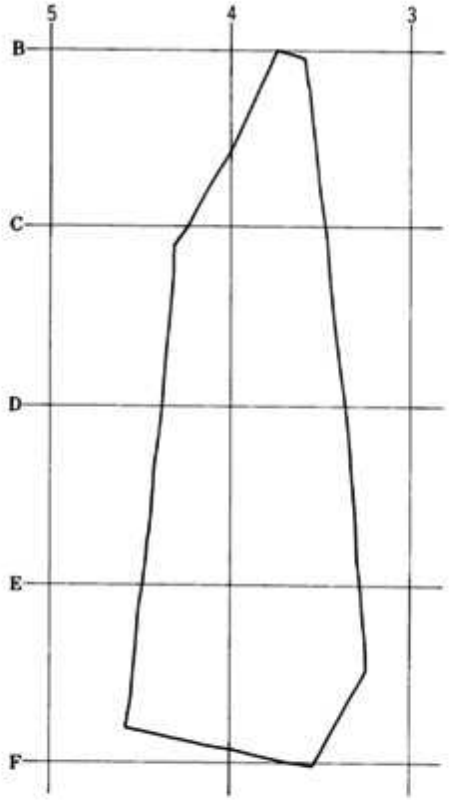
**経　過**

平成８年３月27日　バックフォーによる調査区内表土除去作業を行う。

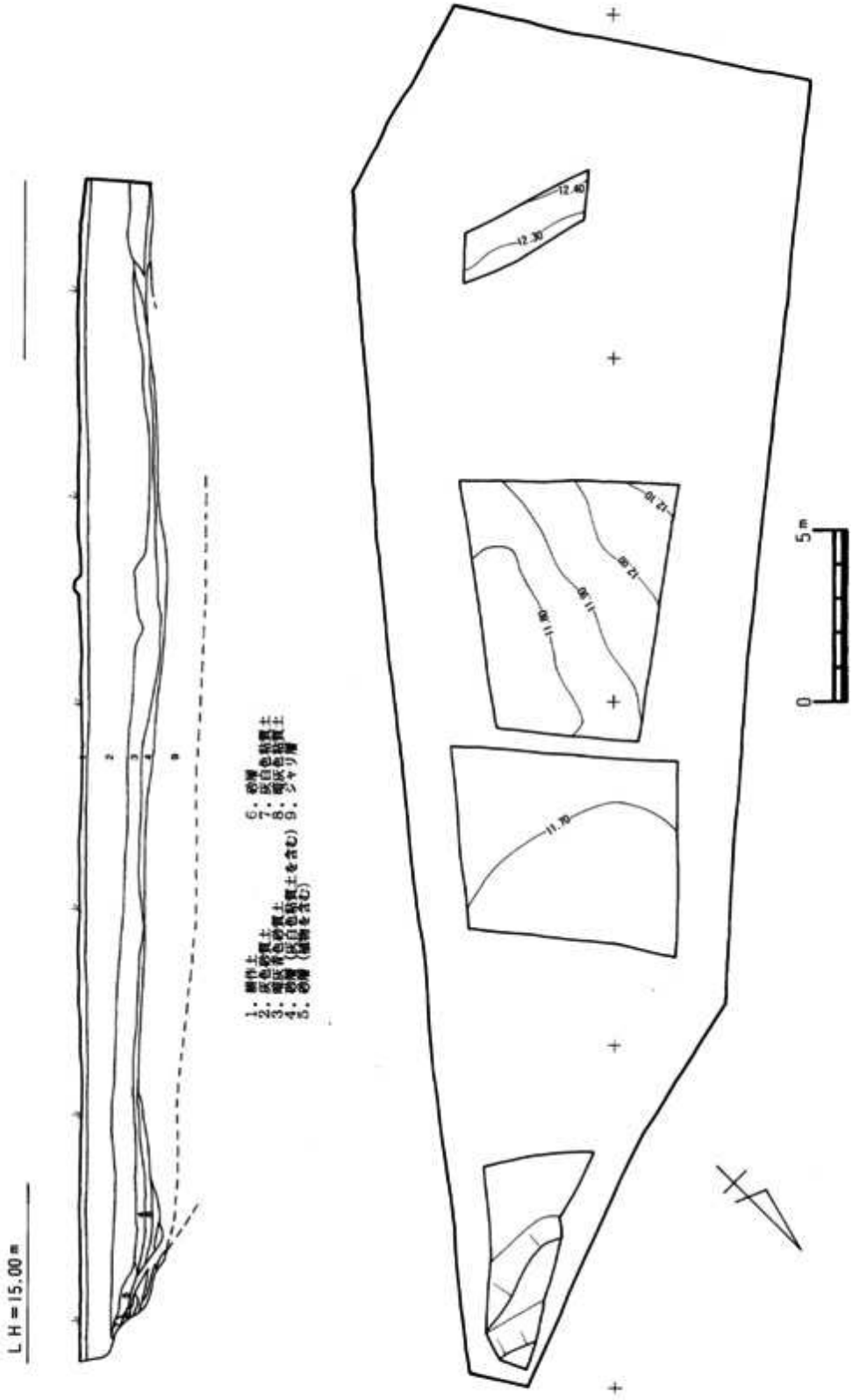
28日　調査の器材を搬入し調査を開始する。調査区内に排水路を設定し掘削作業する。排水路の掘削が完了した地点より土溜作業を行う。

29日　Ｂ３・Ｂ４区の精査作業を行うその結果、旧流路を検出する

４月２日　Ｂ３・Ｂ４




**第３図**　グリット配置図


LH=15.00m
1：耕作土
2：暗褐色粘質土
3：暗褐色粘質土
4：暗褐色粘質土
5：砂層（地山を含む）
6：砂層
7：暗灰色粘質土
8：暗灰色粘質土
9：シャリ層
12.40
12.30
11.70
0
5m

**第4図　全　体　図**

区の掘削作業を行う調査区内より山茶碗をはじめ遺物がまとまって出土する。

3日　B3・B4区を完掘。撮影・計測作業を行いこのグリットの調査を完了する。

4日　C3・C4区の掘削・精査作業を行う。

5日　C3・C4区で杭列を検出し上面の調査を完了する。

8日　C3・C4区の下層面の旧流路の調査を行う。砂利層内より遺物が出土し、取り上げを行う。

9日　D3・D4区内の旧流路の掘削を行い完掘する。

10日　E4区内にトレンチを設定し遺構の確認を行う。その結果遺構が認められなかったため土層観察に留めた。発掘器材を撤収し現地調査を終了する。

# 第Ⅲ章　調査の概要

**遺　構**（第4図）　政所遺跡周辺では、近年、県営圃場整備事業や宅地開発に伴い発掘調査が行われ弥生時代～室町時代の集落跡が明らかとなっている。これらの調査で、地盤によって多少の差はあるものの表土より50cm～80cm程下で遺構を確認することができる。遺構は、黄褐色砂質土に掘り込まれ基盤となっているのが特徴である。今回の調査では、この黄褐色砂質土が調査区北側のB3区内に認められた。しかし、この層は南へ60cm程の地点で急傾斜地形となり消滅している。斜面には、土溜と考えられる杭が検出した他は遺構が認められなかった。

調査での層位は、大きくⅢ区画に分けて考えられる。

Ⅰ　1耕作土と2灰色砂質土から成る水田面である。2層は、調査区北側では80cmの堆積となっているが、中央付近では180cmと最も厚くなり南側では100cmとなり南に傾斜し堆積していることが明らかである。

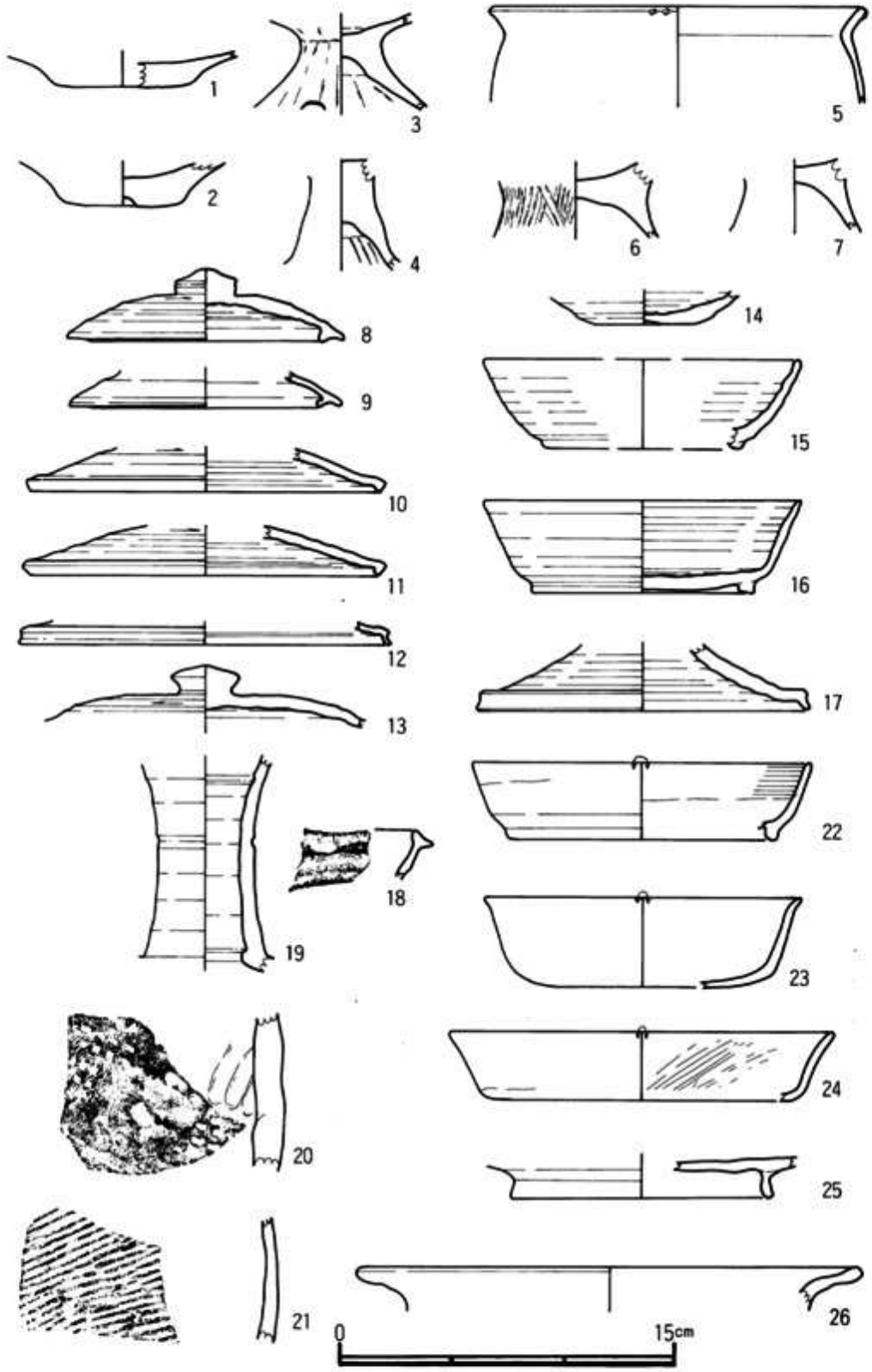
Ⅱ　調査区北側に広がる黄褐色砂質土で、地質的には自然堤防となる。

Ⅲ　3～9の各層からなる構成する旧流路の堆積層である。調査区の全域がこの旧流路にあたり、最下層の9砂利層を含むもので小笠山麓にみられる礫層に類似するものである。上小笠川は、源を小笠山に求めることができ9層堆積は、菊川流域の他河川によるものではないと判断される。砂利層の堆積は、D4ポイント付近を境に南側は北に向って傾斜している。

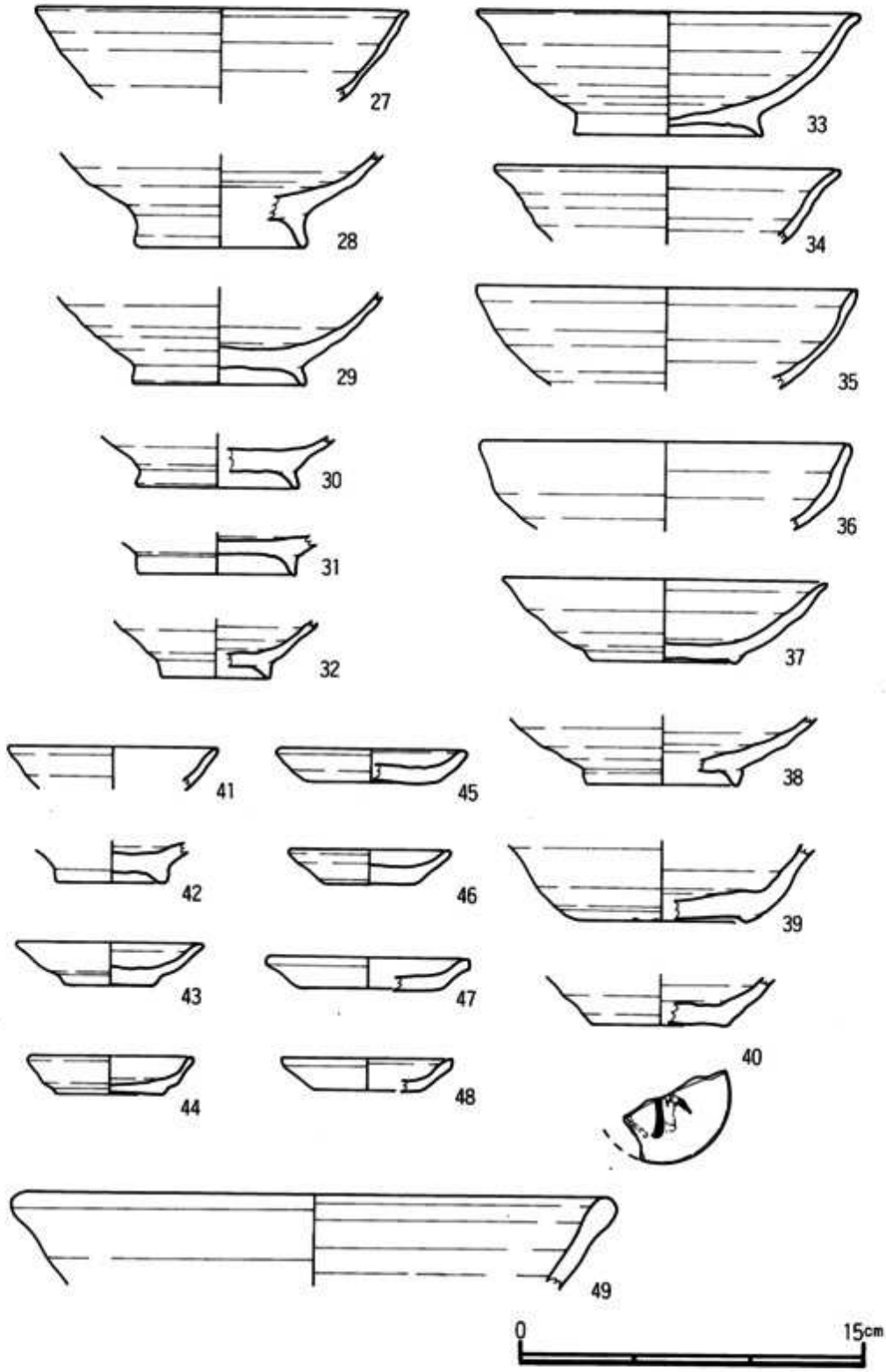
今回の調査では、生活に密接した遺構はなかったものの旧流路が検出された。旧流路は堆積状態より調査区全体の幅を有し、現在の河川よりも北側を東西方向に流れていたことが明らかとなった。

**遺　物**（第５～７図）　出土遺物は、弥生時代～近世のもので全て土器である。土器はポリコンテナに１箱分出土し、弥生土器、須恵器、土師器、灰釉陶器、陶器、陶磁器類である。図示した資料は、旧流路内より出土したもので破片が多い。

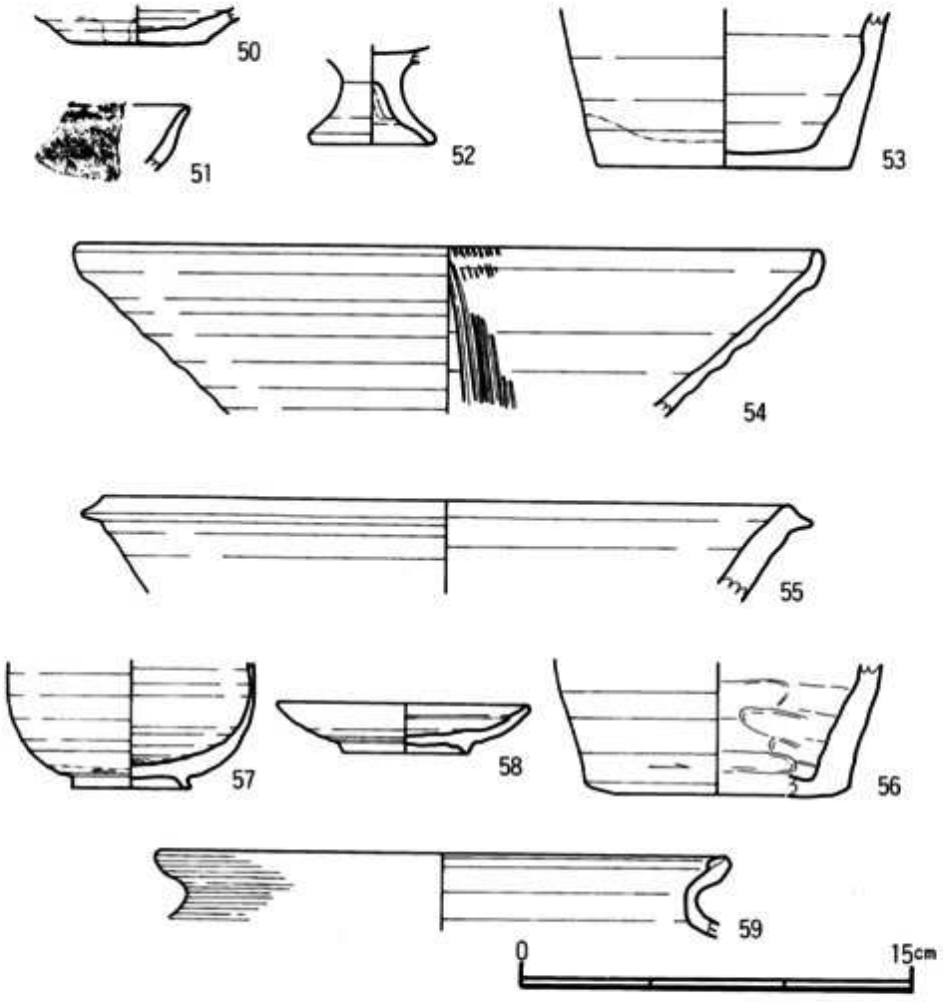
１～７は、弥生時代後期～古墳時代前期のものである。１と２は壺の底部である。１は平底で、底部径6.0㎝を測り黄褐色である。２はドーナツ底で、胎土中に２～５㎜大の礫を含んでいる。３と４は高坏である。３は三方向に孔１㎝程を有し、脚部外面に板ナデ調整が施されている。４は外面に指ナデ調整、内面に板ナデ調整がみられる。５は刻み目のある弥生時代の甕である。口縁部は外反させ端部を面取り方形を呈する。６と７は台付甕の脚部で、ハケ目調整が施されている。８～21は須恵器である。８～13は坏蓋である。８と９は内面にかえりが付く坏蓋である。８の法量は、口径10.3㎝、最大径12.2㎝、器高3.3㎝で天上部から体部上半部にかけケズリが施される。ツマミはボタン状を呈し口径2.7㎝、高さ1.2㎝である。９は口径9.9㎝、最大径 12.0㎝を測る。７世紀後半のものである。10と11は全体に扁平なもので口縁部を断面三角形に呈するものである。法量は、10が口径15.4㎝、11の口径15.2㎝を測る。12は口縁部を少し外側に折り曲げるもので口径16㎝と大型なものである。13は宝珠状ツマミを有するものである。坏蓋は、８世紀後半の製品であろう。14～16は坏身である。14は８・９の坏蓋とセットになる器種で、底部を平らにケズリ調整が施される。７世紀後半のものである。15は高台を有し、半円形状を呈する。口縁部は丸く仕上げ体部に細かいノタ目が残る。７世紀末～８世紀初頭であろう。16は底部から体部にかけて強く折れ直線的に外反させるものである。口縁部は肥厚させて端部を尖らせ、高台は方形を呈する。法量は口径が14.0㎝、器高4.1㎝、底部9.6㎝を測る。８世紀前半のものである。17は高坏の脚部である。口縁部は強く折れて外反させる。18と19は壺の破片である。20・21は甕の体部破片で外面に叩目が施されている。いずれも８世紀の製品であろう。22～26は土師器である。22は有高台の坏で口径14.8㎝、器高3.4㎝、底部11.5㎝を測る。全体に口径に対して器高が低いもので、全面に丁寧なヨコナデ調整が施され丹塗りされている。口縁部は直線的に延びる。23は口径13.9㎝、器高4.0㎝で口径に比べやや深い作りの皿である。口縁部は丸味をもち、立ち上がり口縁部直下を強く外反させている。内外面に丹塗りがみられる。24は口径16.8㎝、器高31㎝、底部11.8㎝を測る。扁平な作りのものである。口縁部は肥厚し外反させる。内外面には丹塗りされ、内面には放射状暗文が施される。25は盤の高台である。焼成は良好で胎土中に雲丹を含んでいる。以上の土師器は８世紀前半の製品であろう。26は甕の口縁部で水平に外反させ端部を丸く仕上げるものである。８世紀のものである。27～32は灰釉陶器である。27は器種は薄手のもので色調は灰白色で口径16.0㎝を測る。この製品は、湖西・渥美地方のものであろう。28～31は碗の高台である。28は高台が1.3㎝と高く色調は赤味のある灰色となっている。体部内外面は、ヨコナデ調整が施され、見込み部は滑らか




**第5図**　出土遺物実測図1




**第6図**　出土遺物実測図2




**第7図**　出土遺物実測図3

になっている。32は小碗の底部である。高台は直立気味に貼り付けられており、法量は4.5cmを測る。色調は灰青色である。29と32は一応灰釉陶器としたが山茶碗のⅠ期の可能性もある。28～32の製品は全て皿山古窯跡群の製品で12世紀後半のものであろう。33～48は山茶碗期の製品である。33～40は碗類で、33～38は皿山古窯跡の製品で39・40は知多半島の製品と考えられる。33の法量は口径16.4cm、器高5.3cm、底部8.0cmを測る。高台は三角形状となり端部を尖らせる。33・34の口縁部は直下で少し外反させる。35・36は口縁部を肥厚させる。37の法量は、口径13.8cm、器高3.5cm、底部6.3cmを測る。皿状の体部に低く粗雑な高台が貼り付けられている。38の高台にはスノコ痕が認められる。39の色調は明灰色で胎土中に1～2mm大の石英・長石の粒が顕著にみられる。高台は低くモミ痕跡がみられる。40は墨書土器で高台が欠損している。41と42は小碗である。41は口縁部の破片で口径8.9cmを測る。42は三角形状の高台が貼り付けられているものでスノコ痕がみられる。内面見込み部には重ね焼跡が残る。

43〜48は小皿である。43と44は底部が台状に厚くなるもので、未調整となっている。法量は、43が口径7.9cm、器高1.4cm、底部5.8cm、44は口径6.9cm、器高1.7cm、底部4.6cmを測る。45と46は底が平らなもので器高が低いものである。45は口径7.9cm、器高1.4cm、底部5.8cmで、46はやや小型となり口径6.8cmとなっている。47と48は口縁部外面強くナデて端面を作り、色調は灰白色で胎土中に石英・長石の粒が顕著にみられるもので知多半島周辺の製品である。法量は47が口径8.6cm、器高1.4cm、底部6.0cm、48は口径7.3cm、器高1.4cm、底部4.6cmを測る。山茶碗類は12世紀後半〜13世紀代のものと考えられる。49は知多半島産の片口鉢である。色調は灰白色で、口径が24.8cm、口縁端部を肥厚させ丸く仕上げている。13世紀後半の製品であろう。50〜58は陶磁器である。各焼物の生産地は、50〜54が瀬戸・美濃産、55・56は常滑産、57・58は志戸呂産と考えられる。50は緑釉小皿の破片で底部は糸切り痕が残る。51は全面に鉄釉が施された天目茶碗である。口唇部は尖り気味で、体部にかけ丸味を帯びる。50・51は古瀬戸後期のものであろう。52は仏餉具の脚部である。脚部は深くえぐり、ヨコナデ調整され端部を丸く仕上げている。坏部見込み部に灰釉が施されている。17世紀後葉〜18世紀前葉であろう。53は底部より体部下端はヘラ削り調整が行われている。底部周辺を除き内外面に灰釉系の釉薬が施される。小片で器種は明らかでないが鉢類で16世紀代か？54は全面にサビ釉が施されている。口径は28.0cm前後で、口径端部は縁帯を形成し丸く仕上げている。体部はノタ目が明瞭に残るが、器壁は薄手である。古瀬戸後期で15世紀後葉のものであろう。55は片口鉢である。色調は赤黄色を呈し、口縁部端部を外方向へ突き出している。口縁部の特徴より14世紀後半と思われる。56は壺、又は甕の底部と考えられる。外面はヘラ削り、内面がヘラナデ調整が施されている。年代は不明である。57の丸碗は黒味の鉄釉をかけさらに灰釉を流しがけするものである。底部から体部下端はヘラ削り調整されている。18世紀代の製品である。58の小皿は貼り付け輪高台を有する。釉薬はサビ釉で化粧がけされているが、体部外面下半部から高台にかけては露胎である。17世紀後半のものであろう。59は伊勢型鍋と呼ばれるものである。口縁部端部を内部に折り返して丸く肥厚させ、内外面をヨコナデ調整している。口径は21.6cmを測り、13世紀代の製品であろう。

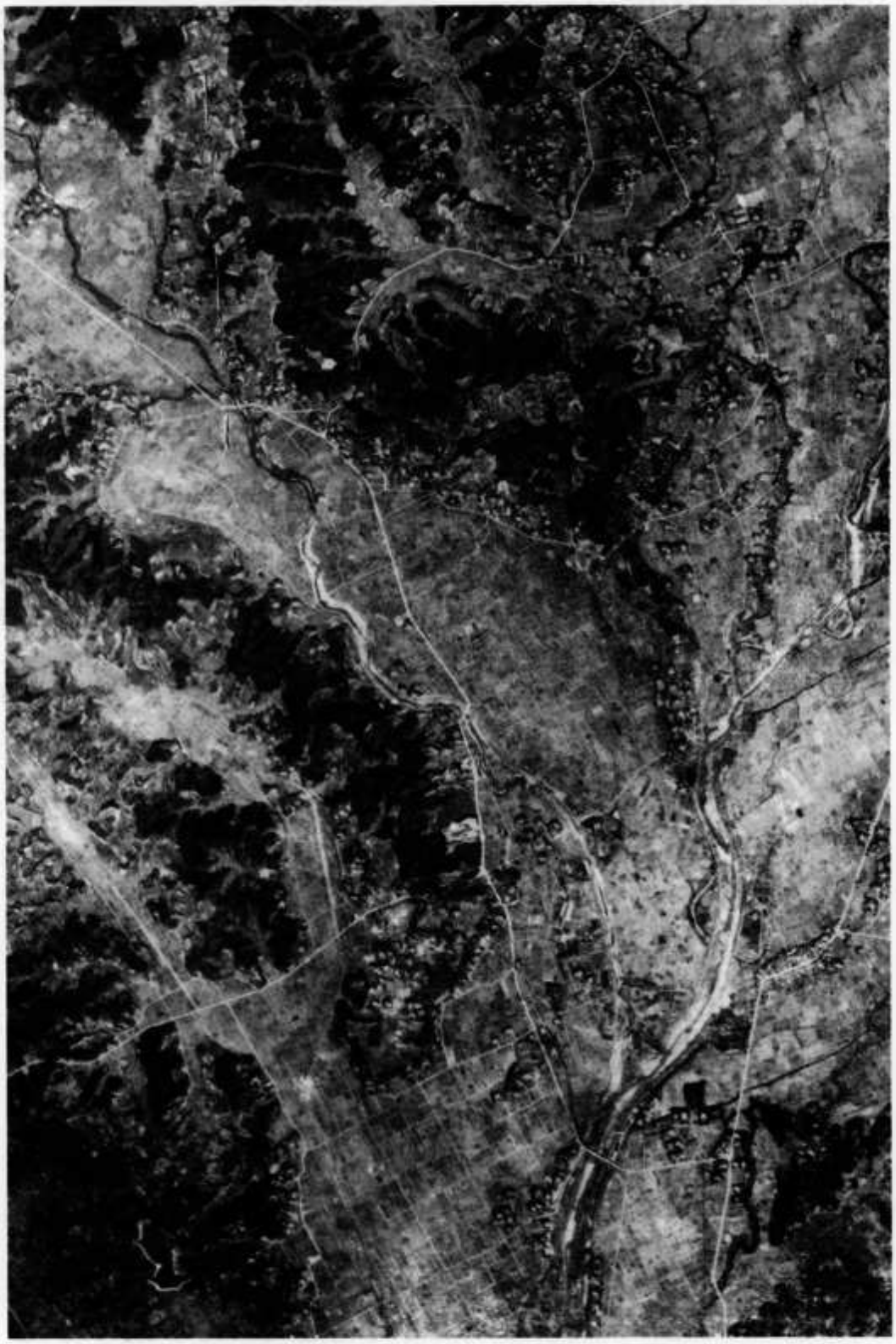
## 第Ⅳ章　ま　と　め

今回の調査で検出された旧流路について検討してみよう。現在の上小笠川は、山本橋より山沿いに沿って南へ流れ、篭田橋に至る。この流路は、小規模な改修工事は部分的に行われていたが本格的に改修工事に着手したのは、昭和10年の菊川改修工事に伴い実施された。しかし、菊川改修工事では支線の一部である耳川から高田付近が行われ、政所より森にかけての流域については、昭和20年上小笠川改修工事として着手

する。当初、上小笠川は山本橋より現在の篭田橋にかけて直線に流路を変える計画であったが、戦時中であり食料増産が第一の課題の時代であったため、工事による耕地面積の減反を避ける必要が生じ、計画の変更を余儀なくする結果となった。計画の変更により、現況の河川の堤を西側へ拡幅する工事で実施することとなった。よって現在の河川は、この時期の流路であり工事着工以前とも変わっていないことになる。昭和以前の流路については、明治前期の地引絵図や土地宝典などの文献資料を検討したが新たな事実は見当たらない。また、古老の聞き取り調査でも明治以降、洪水で堤が切れたりしたものの基本的には同じ位置とのことであり文献資料とも矛盾しない。江戸時代の資料については、残念ながら現在の所絵図等が残っていないため明らかでない。

発掘調査で出した遺物では、52・57の志戸呂産が2層内より出土しており、流路がこの段階で埋まり機能していなかったと考えられる。また、58の小皿が9層の下層内より出土しており、17世紀頃では少なくとも上小笠川が調査区内を流れていたことは出土遺物より明らかである。流路内より出土遺物では古代から中世の遺物が多く、弥生時代の遺物は比較的少ない。周辺の遺跡分布状態から判断するに、あまりにも量的に少なく逆に古代の遺物が出土していることがやや驚きである。流路の堆積での遺物であるために一概に言いきれないが、弥生時代の時期の流路の流れと今回の検出した流路では差があり、古代から中世にかけての流路である可能性が高い。では上小笠川はどの様な地点を流れていたか、過去の調査成果を踏まえて山本橋から篭田橋地点に

**第8図**　上小笠川の流路復元図



昭和20年代頃の上小笠川

ついて検討してみよう。今回調査した地点より東の水田についての調査では弥生時代から中世の遺物と柱穴が検出されており、地形的に自然堤防であったと判断される。よって、少なくとも東の県道を越えることはなく西に流れを変えて篭田橋付近に至っていたと思われる。山本橋から県道間の農道付近と小林製材から県道東にかけて砂利層の堆積が検出しており、この両地点を結ぶと東へ大きく蛇行することとなる。さらに正覚寺付近の河川敷内で砂利層がみられることより、小林製材から正覚寺付近へと西に流れ今回の調査地点に至ったと推測される。推定された流路をみると多くの遺跡の分布とリンクする傾向が認められる。このことは、流路の復元が古代集落の解明の手掛かりとなる方法を指差すものであろう。

旧流路内より出土した遺物は、二次的要因にあるものが大きく、遺物の年代が周辺の歴史解明に直接繁栄しているかは資料を充分検討する必要がある。今回の資料は、摩耗したものはなく比較的表面の残存状況の良好なものであり、遠方より流れてきた遺物とは考えにくい。よって周辺に弥生から鎌倉時代にかけての集落が想定される。現在の所、東ノ坪遺跡、御門前遺跡で弥生時代～古墳時代前期、古墳時代後期～奈良時代、平安時代後期～室町時代の集落が検出しており、今回流路から出土した遺物が周辺遺跡の年代在り方を繁栄した結果となっている。以上のように調査が集落跡等直接生活と関係するものでなくても周辺の遺跡の状況を判断するには有効な調査であったと考えられる。

おわりに本文をまとめるにあたり、足立順司、小林猛、堀川録郎の諸氏からご教示戴いた。末尾ながらここに記して深く感謝申し上げます。

**参考文献**

内田郷土誌編集委員会　1974　「内田の里」
建設省中部地方建設局　1983　「菊川その周辺」
財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所　1991　「原川遺跡Ⅳ本文編」　静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第26集
菊川町教育委員会　1993　「高田大屋敷遺跡第８次発掘調査」　菊川町埋蔵文化財報告書　第25集

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな<br>書名 | 政所(まんどころ)遺跡発掘調査 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 菊川町埋蔵文化財報告書 |
| シリーズ番号 | 第44集 |
| 編著者名 | 塚本和弘 |
| 編集機関 | 菊川町教育委員会 |
| 所在地 | 〒439 静岡県小笠郡菊川町堀之内61 TEL 0537－35－0925 |
| 発行年月日 | 西暦 1997年2月10日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | ㎡ | |
| 政所遺跡 | 小笠郡菊川町<br>中内田 | 22446 | 147 | 34度<br>43分<br>37秒 | 138度<br>40分<br>27秒 | 19960327<br>～<br>19960410 | 400㎡ | 河川改修に伴う調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 政所遺跡 | 散布跡 | 弥生～近世 | 旧流路 1箇所 | 陶磁器<br>山茶碗<br>かわらけ<br>土師器 | |


政所遺跡発掘調査報告書

編集・発行 菊川町教育委員会
印刷 有限会社 陽光社
発行年月日 平成9年2月10日

# 写 真 図 版

調 査 全 景

機械による掘削作業

調 査 風 景

Ｂ３区完掘状態（東より）

Ｂ３区完掘状態（北より）

C 3 ・ 4 区上面完掘状態

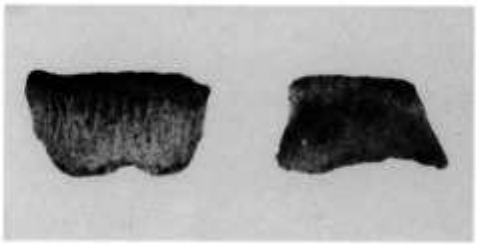
C 3 ・ 4 区下面完掘状態

D 3 ・ 4 区完掘状態

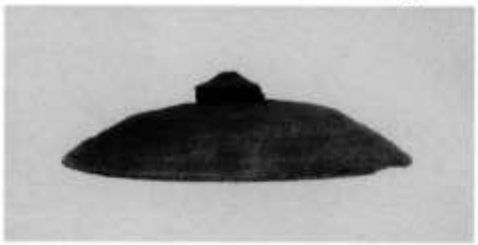
出土遺物 1

5, 4, 1, 2
25, 24, 23, 22
59, 26

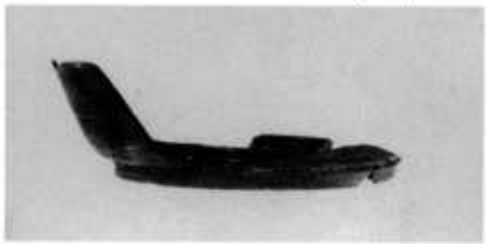
3



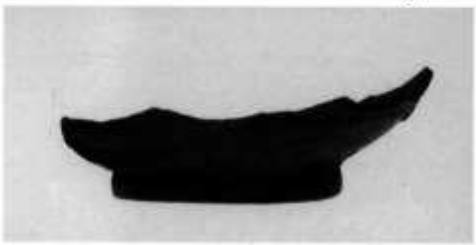
6・7



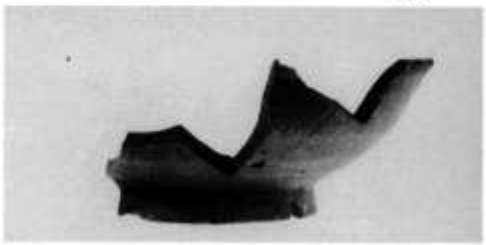
8



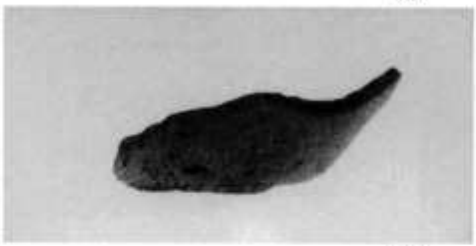
16



29



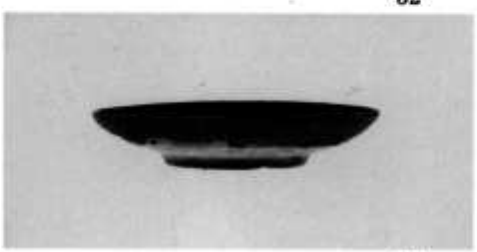
33



39

52

57



58

43

44

出土遺物 2

17, 10, 16, 14
19, 20, 9, 11
18, 12, 13
21, 49

32, 31, 31, 28
35, 38, 42, 40, 37
34, 46, 45, 55, 51
36,41,36,50,56,54
47,48

出土遺物 3